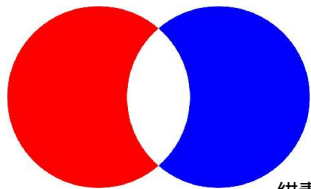


朱色



目次

- P1 事務局通信・朝鮮王朝儀軌返還
- P2 事務局通信・新春交流会
- P3 ニュース・武井さん表彰-
- P4 活動報告
- P5 海峡の島々紀行参加者の文
- P13 お知らせ・交流史講座スタート
- P14 会員の広場

事務局：後藤和晃  
事務局  
-武井一  
事務局幹事  
参加の皆さん  
交流史フォーラム  
李純子

## ◆ 事務局通信

事務局 幹事：後藤和晃

### 1, 「朝鮮王朝儀軌 返還へ」に思う

この10月19日、訪韓中の野田総理は李明博大統領を訪ね、韓国併合の折、日本に持ち出されていた朝鮮王朝の記録 朝鮮王朝儀軌など5冊の返還を行いました。儀軌は、朝鮮王朝が行った婚礼や葬儀など様々な行事を、華麗な色彩で絵図として記録したものです。韓国民にとっては、王朝の歴史を伝える貴重な文化遺産といえます。



としてその返還を韓国に通知、今回は返還する1205冊のうち5冊を象徴的に引き渡したという訳です。残りの1200冊も今年中に韓国に返されます。



宮内庁書陵部

ところが1910年の韓国併合の後、韓国にとって一大事が起ります。朝鮮王朝儀軌を始めとする1000点を超える貴重な古文書が日本に渡り、皇居の中にある宮内庁書陵部の書庫の奥深くに納められてしまったのです。

世界では、現在「先進国が他国の遺跡から発掘し持ち出した出土物を本来の国に返すべきだ!」という主張が強まっています。韓国でも「日本にある儀軌などは本来あるべき国、韓国に早く、引き渡されるべきだ!」という声が年々、強まってきました。

そして去年、日韓併合から100年という年を迎え、日本政府は「未来志向の関係を築く第一歩」

私は儀軌返還の陰には次のお二人の影響が大きかったと考えています。その一人は今の天皇陛下、もう一人は今年の6月まで38ヶ月間という長期間、駐日韓国大使だった権哲賢(クオン・チョルヒョン)氏です。お二人は権大使が着任の挨拶に皇居を訪問した2008年以来、親しい仲だったと思われる。

というのも権氏は若い頃、日本の筑波大学に留学した経歴があり、日本人と変わらない日本語が話せる人物だったのです。その上、来日前は政権与党のハンナラ党の3選議員として、韓日議員連盟の幹事長という大役も勤めていたため、日本の著名な政治家、経済人、ジャーナリスト等々と幅広い人脈を築いていました。日本について幅広い

知識を持っていた権氏は、大使として天皇を初めて訪ねた時、天皇があの特徴的な「韓国とのゆかり」発言を初めて行った人物であることを承知していて、大きな関心と期待の念を持っていたはずで

す。「ゆかり発言」をここで再確認しておきましょう。時は2002年に日韓がサッカーのワールドカップを共催する直前でした。天皇は2001年の1年間、教科書問題や小泉首相の靖国神社参拝で日韓の関係が大変冷え込んでいたのを懸念されたのか、暮の天皇誕生日の記者会見で次のように述べられたのです。



権哲賢氏

「私自身としては桓武天皇の生母（高野新笠＝たかのにいがさ）が、百済の武寧（ぶねい）王の子孫であると、続日本紀（しょくにほんぎ）に記されていることで、韓国との深いゆかりを感じています。」

この談話は、翌日の韓国各紙に大々的に報道され、韓国市民の天皇観に大きな影響を与えました。当時、天皇と書かず「日王」と表記していた韓国紙も徐々に「天皇」と記す例が増えていきます。

大使となった権氏は、当然この「ゆかり発言」はよく知っていました。知日派の駐日大使と韓国との浅からぬ縁を実感していた天皇との出会いは、さぞ温かい雰囲気にも包まれていたものだったにちがいません。そして、この出会いこそが儀軌返還を実現した遠因になったと見るのは、果たして文学的な見方にすぎるとは思いませんか？

権大使が在任した38ヶ月の間も、日韓の間には

竹島（独島）や教科書、慰安婦の問題などで毎年のように、さざ波が立っていました。しかし権大使は、2008年に韓日間の300億ドルの通貨スワップ協定を結ぶことに成功するや、密かに朝鮮王朝儀軌の返還について水面下の交渉を進めていきます。権氏の心中には「本来、皇居に秘蔵されている古文書の引渡しは、常識では困難ではあるものの、しかし現在の天皇なら、心の中では返還に理解を示されるに違いない」との確信があったのではないかと推測されます。

そうした推測を裏づけるようなエピソードがあります。

今年の6月、任務を終え帰国するばかりの権氏のもとへ、天皇から伝言が届きます。「別れの昼食会を行いたいのので、ご夫婦でお出かけ下さい」というものでした。国賓以外の外国人が天皇から昼食会に招かれるということは、極めて異例の事です。

昼食会の席には美しい音楽が流れていました。権氏夫妻はCDの曲が流れていると思っていたのですが、音楽が終わって天皇がカーテンを引くと、なんと30名ものオーケストラのメンバーが控えていました。天皇が楽団員に問いかけます。

「皆さんの中で、ご先祖さまが韓国から来た人はいますか？」

一人の楽団員が手を挙げ、誇らしげに答えました。「私の先祖は、1000年以上前の奈良時代に韓国からやってきたと伝わっています！」

このようにして、権哲賢氏を手厚く送った天皇の行動には、親しい友を送る惜別の情がこめられていたように思えます。天皇と権哲賢氏、お二人の間に芽生えたような絆こそ、難しい関係が続ける日本と韓国の間には、ぜひ必要だと皆さんにも同意していただけるでしょう。

私たちの会も足かけ14年、韓国の人々との間に少しずつ、少しずつ絆をつないできました。どんなに小さくとも、どんなに迂遠な道でも、人の絆を築き続けていけば、いつかは日韓が本当に和解できる日が来ると信じたいものです。

写真は8/19放送のNHK番組「朝鮮遺産 百年の流転」から引用

## 2, “ 会員・新春交流会 ” にぜひ、ご参加を！

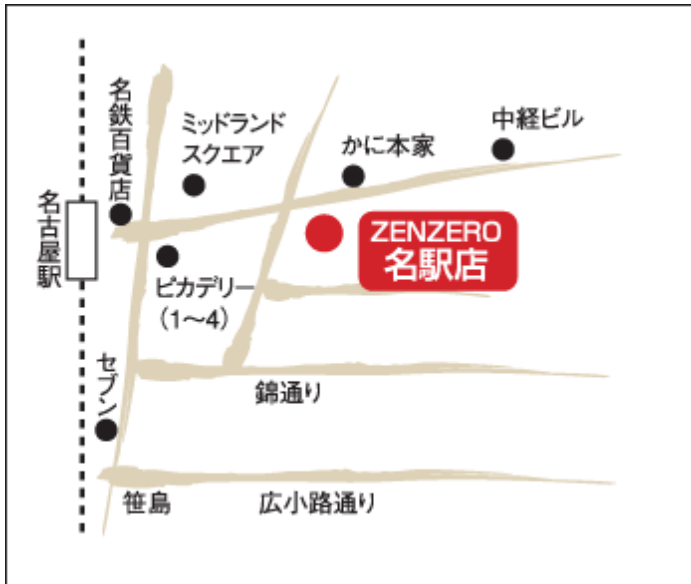
1月早々に、会員や協力者の皆さんの相互交流を図るため新春交流会を開きます。1998年2月に発足した私たちの会は、来年2月には、なんと発足15年目の春を迎えます。「政治も宗教も、経済活動も一切係わりなく、純粋な市民の立場で民間の交流を一步ずつ進めよう...」という当初からの姿勢には、一切変化はありませんが、メンバーの顔ぶれは、かなり変わってきています。

戦前の韓国で生まれ、敗戦で帰国してきた日本人グループのうち、会結成当時に、既に高齢だった方々は大半が逝去されました。一方で日韓交流史や韓国の固有の文化に強い関心をお持ちの方々の数が増えてきています。また韓国語を学び、Kポップを楽しむ若者たちも入会するなど、会員の年齢構成も少しずつ若返っています。このように関心の対象も年齢も様々な会員の皆さんが、一堂

に会する機会は、なかなかありません。

そこで2012年1月14日(土)の昼食時間に、交通至便の名古屋駅に近いイタリア料理店で交流会を開き、会員の懇親を図ります。会員や協力者の皆さん、留学生の代表に在日の方々なども参加、

和気あいあいとした雰囲気の中で、相互の親善を図っていただきます。まだ入会されていない方も歓迎します。ぜひ多数の方の参加をお待ちしています。



### 新春交流会

- 日時 1月14日(土) 12:15 ~ 14:30  
開場・受付は 11:30 ~
- 場所 名古屋駅東 ミッドランドスクエアの南東隣 琥珀(こはく)ビル2F  
伊太利亞料理店 ゼンゼロ  
052 - 565 - 0001
- 会費 成人 5000円 学生 2500円  
留学生は招待
- 申込み 同封のハガキで出欠を返信下さい  
参加費は同封の振込用紙で本会口座宛振り込んでください

## ニュース

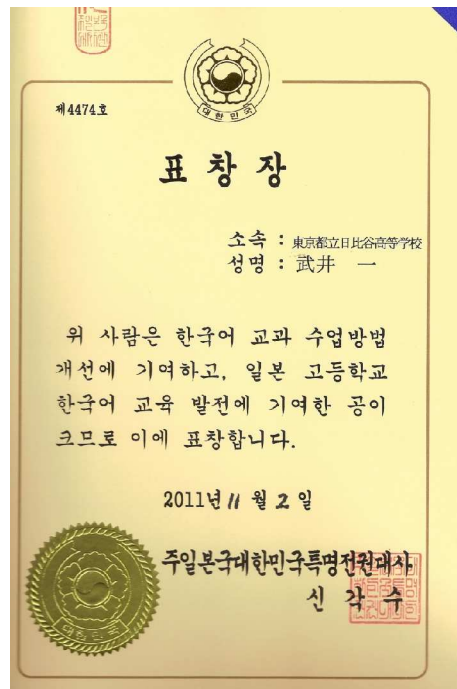
### 駐日大使から会員に表彰状

~ 日比谷高校・武井一さん ~

11月2日、東京で日韓交流史講座の主任講師としておなじみの会員、武井一さん(東京在住の47歳)が申瑛秀(シン・ガスク)駐日韓国大使からの表彰状を受け取りました。表彰の理由は、「韓国後の授業方法の改善をすすめるなど、日本の高校における韓国語教育の発展に寄与された」というものでした。

武井さんには日比谷高校などで韓国語や地理、倫理などを教えている教員ですが、永い間、全国の教員仲間たちと共に、韓国語教育のあり方を研究、工夫、発展させてきました。一方で、日本の文部科学省の依頼で日韓の高校生交流を手助けしたり、韓国語政府の機関が日本で行っている「韓国語で話そう!」コンテストの審査員もつとめるなど、多彩な働きをきてきました。

武井さんは、皆さんもご存知の通り、会の創設の頃からの重要なメンバーで、会の中でも韓国史への深い知識を生かして、日韓交流史を学ぶ講座や現地紀行の講師として活躍してもらっています。今回の受賞は、まことに御同慶の至りです。武井



さんは喜びの気持ちを次のように語っています。

「表彰状が頂けるなど全く考えていなかったの、嬉しかったです。これからも成果をあげる努力をしなければと思っています。賞状は大使の代理から頂きました。申大使は1993年から数年、東京の大使館で在勤された方といいますので、その頃、1~2度は顔を合わせていた方でしょう。今度会ったら、しっかりお礼を言いたいと思います。」

なお、私たちの会では2年前の2009年1月11日に、会員で韓国の伝統時調研究家である瀬尾文子さんが、「時調の研究と普及に貢献」と当時の韓国大使、権哲賢氏から賞状を贈られました。また同じ日、会の事務局長

後藤和晃も「日韓の友好親善に尽力」と賞状を受けました。

今回の武井さんの受賞で、これまでに会員3人が韓国大使から賞を贈られたことになり、私たちの小さな団体としては、この上ない名誉を頂いたといえるのではないのでしょうか。

## 武井さんからのメッセージです

このたび、東京韓国教育院から「功労賞」(駐日韓国大使館賞)をいただきました。この秋、東京韓国教育院で第1回韓国語作文大会が行われました。

そのときに、応募者だけでなく、指導した韓国語教員からも表彰しようと言うことになったそうです。

私は、現在、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク東ブロックの代表を務めていますが、この大会にも相談に乗ったりしました。このことが表彰のきっかけになったのだと思います。

表彰状には「韓国教科授業方法の改善に寄与し、日本の高等学校の韓国語教育発展に寄与した」と書かれています。まだまだ、力が及びませんが、この言葉に負けないように、努めていきたいと思っています。



## ◇ 会の活動報告

### 1, “文明の十字路口” 海峡の島々紀行を実施

～ 9月27日から9月30日 ～

今回の旅行は日韓交流史講座の第4シリーズ(対馬、杵岐、北九州地方)の締めくくりとして行いました。参加者は、解説をお願いした西谷正先生(九州歴史資料館長)を含め、31名という多数に上りました。旅行の日程表を参考までに下に掲載します。丸4日間、朝から夕べまで数え切れないほどの地点を巡ったことがよく理解して頂けるでしょう。一部の方々に旅行の感想文をお願いしましたが、今回は驚いたことにほとんどの方が旅先で感じたことを俳句という形で記録されて

いました。詠い込まれたたくさんの俳句は、私たちの仲間が日韓交流史に深い知識と関心を持っているというだけでなく、俳聖、芭蕉いらい培われてきた日本の香り高い文学的風土を、しっかり受け継いでいる人たちであることも証明してくれました。こうした人たちが会を、そして韓国の人々との交流を支えていただいているかと思うと、嬉しさと胸が熱くなります。日程表の後に掲載されている皆さんの旅行記にぜひ、目を通していただくようお願いします。

### 文明の十字路口・海峡の島々紀行

主催：日韓交流史フォーラム

後援：名古屋国際センター

No	2011年	都市	交通	予定時刻	主要旅程	食事
1	9 / 27 (火)	名古屋	ANA 213	7:15	中部国際空港 3階 北ウイング国内線ビル - 待合所集合	朝 ( × )  昼 ( ろくべえ )  夜 ( 石焼料理 )
				8:00	中部国際空港発 9:25 福岡空港着	
		福岡	ANA4933	10:15	福岡空港発	
		対馬	専用車	10:50	対馬空港着 11:20 空港発	
		鱒浦		13:00	韓国展望所	
		比田勝		13:50	ももたろう (上対馬町古里1-2 0920-86-3907)	
		上対馬		14:55	塔の首遺跡	
		峰町		15:55	峰町歴史民俗資料館	
		美津島		17:30	阿麻? 留神社 ~ 浅海湾 小舟越 ~ ホテル	
		巖原		19:30	夕食 志まもと (巖原町国分1380 0920-52-5252)	
宿泊：ホテル対馬 長崎県対馬市巖原町今屋敷765 TEL 0920-52-7711						

2	9 / 28 (水)	豊玉町	専用車	8:30	ホテル発	朝 ( ホテル )
		美津島		9:30	豊玉町郷土館 ~ (浅芽湾) 和多都美神社	
		巖原		11:00	鳥帽子岳	昼 ( 対州そば )
				12:10	根曾古墳群 出居塚 (前方後円墳)	
				14:00	対馬ふるさと伝承館 (鶏知乙461-6 0920-54-8311)	夜 ( いりやき )
				14:50	長崎県立対馬歴史民俗資料館	
				15:45	万松院 ~ 小茂田神社(元寇上陸地)	
				18:20	ホテル着	
				19:00	夕食 志まもと (巖原町国分1380 0920-52-5252)	
宿泊 : ホテル対馬 長崎県対馬市巖原町今屋敷765 TEL 0920-52-7711						
3	9 / 29 (木)	巖原	専用車	6:00	ホテル発、巖原港へ	朝 ( お弁当 )
		壱岐	専用車	6:45	巖原 発	
		芦辺		7:50	芦辺港着、壱岐交通バスにて	昼 ( うに料理 )
				8:15	原の辻遺跡 ~ 一支国博物館 ~ 安国寺	
		勝本		10:55	島分寺跡 ~ 鬼の岩崖古墳	夜 ( 海鮮・潮騒 )
				11:40	双六古墳 ~ カラカミ遺跡 ~ 月読神社	
		郷の浦		13:20	はらほげ (芦辺町諸吉本村触1307 0920-45-2153)	
		石田	エメラルド	14:45	勝本城跡(曾良の墓) 城山公園 ~ 阿桶陀堂	
		唐津東	からつ	16:25	岳の辻遺跡	
		名護屋	からつ	17:30	壱岐・印通寺港発	
				19:10	唐津東港着、名護屋へ ~ ホテル	
				20:15	夕食 ホテルにて	
宿泊 : 大望閣 佐賀県唐津市鎮西町名護屋1399 TEL 0955-82-1711						
4	9 / 30 (金)	名護屋	専用車	8:30	ホテル発 中央観光バスにて	朝 ( ホテル )
				9:00	羽戸岬より海峡の島々を眺む	
		糸島		11:30	佐賀県立名護屋城博物館・名護屋城跡	昼 ( そうめんちり )
				12:40	久里双水古墳	
		福岡		13:10	伊都国ファームパーク「ひみこ」(092-322-7661)	夜 ( × )
				13:10	伊都国歴史博物館 ~ 三雲遺跡 ~ 平原遺跡	
				15:25	志登支石墓群 ~ 元岡古墳群G6号墳	
				17:30	福岡空港着、チェックイン後 各自夕食	
			ANA 236	19:30	福岡空港発	
		名古屋		20:45	セントレア空港着 集合挨拶の後 解散	

## 歩いた 見た 学んだ 日韓交流史

田口 良浩

南北に細長い対馬のほぼ中ほどにある峰町の歴史民俗資料館でいただいた「対馬市峰町の文化財マップ」の裏側に、峰町を中心とした同心円が50km間隔で5本入った地図があります。それによると韓国の釜山までは50kmちょっと、九州の福岡までは丁度150kmです。対馬北端、鰐浦の韓国展望所の表示板には、釜山まで49.5kmとありました。この“距離感”が日韓交流史フォーラム主催の4回の紀行のキーワードではないかと思えます。

2009年8月の「謎の国・伽耶紀行」、2010年7月の「栄光の百済残影紀行」、2011年2月の「黄金の新羅残影紀行」そしてこの9月、日本側から見た「文明の十字路・海峡の島々紀行」。この4回の旅で、朝鮮半島から土器、鉄器、装身具、馬具、

武器などのモノ、それに伴う技術や文化、さらに多くの人々がそれぞれシャワーのごとく対馬、壱岐を経て北九州地方に降りそそぎ、日本列島の各地に散らばって行ったことを知りました。しかしこの流れは決して一方的ではなく、日本(倭)からもヒト、モノ、文化が半島にもたらされたことも知りました。

いくつかの例をあげてみますと、伽耶紀行では、半島南部の勒島から弥生土器が見つかっていて、今でもその畑に弥生土器が無造作に転がっていました。百済紀行では宋山里古墳群にある武寧王陵の王の柩はコウヤマキが使われていました。コウヤマキは韓国にはなく日本産だということです。新羅紀行では、王陵から出た王冠の飾りのヒスイ

は新潟県糸魚川産だということを知りました。他にも日本オリジナルの前方後円墳をいくつか訪れました。

これらはほとんど対馬・壱岐を経由して行き来しています。まさに文明の十字路と言えましょう。ひょっとしたら海峡の島々を中心に、当時の朝鮮半島南部と北部九州が一つの国を形成していたのではないかと。

そんなこと勝手に想ったりしています。

慶北大学の朴天秀教授、九州歴史資料館の西谷正館長など現地を案内していただいた先生方の情熱的で分かり易い解説には大いに感銘しました。

サプライズもありました。朴先生には、予定にない遺跡の発掘現場に案内していただき学芸員の説明を受けました。生々しい発掘現場を見ていると、そこに生活していたであろう古代の人々の息づかい、空気、風を肌で感じたものでした。また西谷先生のご案内で、福岡市西区にある古墳時代末期の古墳から、つい一週間程前に出土した紀年銘入象嵌大刀について、発掘担当の方から現場で解説していただきました。これもサプライズでし

## 文明の十字路

期待を膨らませて対馬飛行場に降りる。この飛行場は島の約9割を山が占めるため、山頂部を削り作られたという。また別名「対馬やまねこ空港」の愛称がある。そういえば荷物受取り所で対馬山猫らしき剥製の出迎えを受ける。

あわただしい中、午前11時前にはすぐに観光バスに乗ってスケジュール一杯の島巡りにスタートした。

ところで私達夫婦にとって今回の対馬・壱岐は初めての旅であり、それだけに夢も一杯であった。また対馬・壱岐は古代日本列島と朝鮮半島を結ぶ至近の距離にあって、両島と九州北部・朝鮮半島南部は一つの文化圏にあったと思われる。歴史的には白村江の戦い以後、倭国と新羅はそれぞれ独立した歩みを辿るようになるが、この両島には国境という概念がなかった古代の梯が遺跡や神社などに垣間見られるのではないかと期待しての旅であった。

対馬からはじまり壱岐・北九州の唐津・糸島を巡る3泊4日の探訪は、西谷正先生の魏志倭人伝の行程をベースにした引率と解説で行われた。古代の対馬国、一支国、末盧国、伊都国等を貫く古墳・遺跡群の40頁にわたる資料をわざわざ作成していただいたことには、ただただ感謝の他はない。

考古学の権威で九州一帯の遺跡調査に殆ど関係しておられる先生の案内は、我々素人にとって勿体ないくらいであった。誠実で気さくな先生の丹念な説明を受けることが出来たのは、これ以上ない幸せであった。先生には心からお礼を申し上



対馬・塔の首遺跡

た。

酷暑の中で古墳を歩きまくり、ドカ雪をかき分けての王陵巡り。いずれの紀行も高齢者の多い中、タイトなスケジュールで肉体的にはかなりハードでしたが、それを上回って知的好奇心を大いに満たされた楽しい楽しい タビ・たび・旅 でした。

松尾 博雄・松尾 由美子

げるとともに、後藤さんをはじめお世話いただいた皆さんに謝意を表したい。

今回の旅行では多くのことを学ぶことが出来たが、特に印象に残ったことを以下書き記したい。



### 【阿麻氏留神社（あまてる）】

それにしても対馬・壱岐には式内社が多い。神々の古里と呼ばれる古神道の島といわれる所以である。九州と壱岐・対馬を西海道と称するが、その西海道に存在する式内社107社のうち対馬に29社、壱岐に24社、合わせて約半数がこの二島に集中している。なかでもこの阿麻氏留神社は日神（天日神命）を祭る古社で、浅茅湾と対馬海峡東水道がもっとも近い国道382号線添いに数十段のぼった小高い丘の上にある。両湾は陸で閉ざされていたため船を陸に揚げて移動し、東西の海を渡ったことから小船越の名がある。この神社の上からは常に左右の水道を見下すことが出来たに違

いない。つまり要衝の地にあったということである。この神社がいつ頃から存在するのかはよく分からないという。

いずれにしても天日神を拝し日本書紀にも記されていることから、天照大神の源流のように思えてならない。

### 【和多都美神社（わたつみ）】

浅茅湾の奥まった入り江の仁位にこの神社はある。烏帽子岳の麓に位置する。延喜式神名帳に名前の見える式内社で、豊玉姫と山幸彦を祭る海宮（わたづみのみや）の神話で名高い竜宮伝説が残されている。

神社の前は浅茅湾の海が広がり、海中の2本の鳥居と陸地の3本の鳥居が一直線につながり神社の社殿へといざなう。まことに神さびた風景である。



3の鳥居をくぐって左手の海水に小さな三角形の形をした不思議な鳥居があり、その囲まれたなかに「磯良恵比須の磐座」がある。古い祭祀における御神体の石だったのではと案内板に記されていた。こうした独特の3本鳥居と御神石は本殿の左脇にもあり、謎めいた雰囲気誘う。

社殿の奥は鬱蒼とした社叢がひろがり、射し込む光とともにいよいよ神域感が漂う。そのまた奥に御祭神である豊玉姫命の墳墓があり、思わず掌を合わせる。

対馬は壱岐同様多くの神社が集中し、まこと神々のふるさとにふさわしいとの感を強くした。



### 【月読神社】

二日間の対馬の旅を終え、三日日早朝壱岐の芦辺港に着く。魏志倭人伝にいう一支国（いきこく）の島である。対馬が山々の島であるならば壱岐は平野の島であり、面積は対馬の5分の1約134平方キロと小さい。

まず原の辻遺跡を訪れる。弥生時代の一支国の王都に特定され、多重に巡らされた環濠や東アジア最古の船着き場跡、祭儀場跡など九州吉野が里遺跡に比肩できる弥生都市である。遠い昔から朝鮮半島と日本列島を結ぶ要衝にあって東アジアとの交流の役割を果たしてきたことを物語る。

ところで島の中心部「へそ石」の近くに「月読神社」が鎮座する。観光案内書には、壱岐最古の神道発祥の社とある。対馬の阿麻テ留神社同様、鳥居の先に急な石段の参道があり小高い山裾にある。社縁起によれば月読命を奉祭し、伊勢の天照大神、素戔鳴尊とともに三貴神と呼ばれ、他の大神とは別格とされている。非常に古い神社で古事記の開闢神話に出てくる対馬の「日神」と当地の「月神」とは対をなして古代神話の基になる祖神なのではないかと想定したくなる。



### 【曾良の墓】

今回の旅行で是非お参りをしたいと思っていた所である。その俳人曾良の墓は壱岐の北端勝本の入江を望む山裾にある。

將軍の代替わりの際、諸国の治世を巡検する幕府の巡見使の随員の一人として壱岐に渡り勝本の中藤家に一泊した。元々虚弱な曾良はそれまでの無理がたたり病に倒れ、此处中藤家で客死する。1710年享年62才であった。曾良は芭蕉弟子十哲の一人で、「奥の細道」にも芭蕉に随伴し「奥の細道随行日記」を残している。墓は中藤家の墓地にある。多くの人を訪れるのか秋の供花の中に頭部が欠けた苔むす小さな墓標であった。近くには曾良の句碑があり、「行々てたふれ伏すとも萩の原」と刻まれている。

### 【名護屋城跡】

名護屋城跡は中世松浦党の交易拠点であった松浦郡北東部の小さな湾内に位置する。約400年前

大陸への進出を目論む秀吉によって、その軍事拠点として築造された。現在では特別史跡に指定されている。

我々名古屋人にとっては、秀吉が名古屋中村の出身であり、城の名も同じ名古屋と読めることも手伝って懐かしさを覚える史跡である。この城は文禄・慶長の役が終ってからは廃城となり直ぐに取壊された。そして使用された期間が短かったため、戦国の山城時代から江戸期の平山城時代に移行する過渡的な城郭形式をよく残しているといわれる。本丸を中心に展開される五主郭はじめ大小11の腰曲輪など城郭は総面積約17万㎡、大阪城に次ぐ広さである。この城郭はほぼ当時のままであり、また大手口の野面積の石垣や埋められた本丸の石垣なども同様である。



城跡脇に開設されている名護屋城博物館の肥前名護屋城図屏風など数々の展示品を見ながら、往

## “海峽の島々紀行”に参加して

私と柳原恵子さんは会員ではありませんが、西谷正先生からこの企画を教えていただき、参加することが出来ました。私たちは約30年近く前から「古代史を学ぶ岡崎の会」を細々と継続しています。今年10月末で例会は592回を数えます。その10周年記念講演会に森浩一同志社大学教授(当時)をお招きした後、森先生企画の新羅や百済や伽耶を巡る韓国ツアーに参加した際、日韓考古学の専門家として九州大から参加された西谷教授とご縁が出来ました。5年程前には特別例会講師として、岡崎へも来ていただいています。

さて、今回の旅は、初日の対馬の北端の韓国展望所から最終日の元岡古墳群まで、訪問地は40ヶ所近くにのぼりました。「4日間で、よくもまあ効率よく廻ったな」と言うのが帰宅してすぐの感想です。

印象深く思い出されるのは、対馬の地形です。深く細長い入り江は、川なのか海なのか？でしたが、1日目夕方、西の漕手を訪れた後、2日目に車窓から「この辺りも昔は海であった所」とのガイドさんの説明に、ようやく肯くことができました。

時の雄壮な城郭を思い描いた。

(その外2点ばかり)

今回うれしく思ったことは、旅程の中に多くの資料館・郷土館や博物館を入れていただいたことと、対馬でのバスガイド鳥羽さんの案内のことである。

限られた日程で散漫になり易いなか、資料館などの見学は、全体を総合的に理解する上で大きな手助けとなった。時間的な制約があったものの資料集を求めることなどで緩和されたように思われる。

それから、対馬での鳥羽さんのガイドぶりには大いに感謝している。たぶん対馬きってのガイドさんであろう。戦後間もない生まれと聞いたが、実に対馬のことをよく熟知しておられ、今ではもう皆が忘れ去った過去のことなどもすらすら話されるのには感銘した。ふと思ったことだが、こうした貴重な説明はすぐに右から左へ消えていってしまうもの。地元の教育委員会などで詳しく聴き取り、録音保存されても良いのではなどと思った次第である。

今回の旅行を企画していただいた関係の皆様に変更して心からお礼を申し上げます。

暮れ初むる浦ひややかに紡ひ舟	博雄
支石墓の古りたる墓標新松子	博雄
またひとつ古代に触れた井の蛙	由美子

山田 伸子



対馬の地形変化の激しさは、壱岐を訪れた後にますます実感出来ました。初日の機内から眺めた壱岐のなだらかな印象は、対馬の厳しさと対照的でした。「魏志倭人伝」の地形記述の正確さが分かったような気がします。

以前から北部九州の弥生時代遺跡からの出土品には、韓半島系の遺物が多いのは知っていたのですが、峰町や豊玉町などの遺物を見ると、いかに



大陸や韓半島との交流が深かったか思い知らされました。初日の韓国展望所から「焼き肉屋が見えることがあるですよ！」との武井先生のことばは、衝撃的でした。(対馬から韓国釜山までの距離=49,5 km岡崎から名古屋までの距離=40 km)

そして、釜山周辺の伽耶系の遺跡から、日本の弥生土器そのものが出土していることも思い出しました。ジェットコースターが苦手な私にとって、今回の旅の前、飛行機や船の揺れが最大の恐怖でした。古代に小さな船で海を渡った方々のまねは、とても私には出来ません。どんな思いだったのでしょうか。

今年の対馬ツアーに参加した知人からは、2月は帰りの飛行機が飛ぶかどうか心配したとか、6月は欠航で困ったなどという経験談をきいていましたので、台風シーズンでもある今回のツアーのお天気には、感謝感激でした。

原始・古代から近代にいたるまで幅広い見学地でしたから、それぞれの感想を述べるとなると膨大になりそうですが、感激したことを、なるべく時代順に簡単に上げてみます。縄文時代の初めから、すでに西北九州や韓半島南東部との交流を示す遺物を見た。縄文後期には北洋系と南洋系海民文化が対馬で交流していた。徳島在住の知人から指摘されていた対馬出土の有孔笠形銅器を何点か見た。鑄つぶして国産銅鐸などの製造のための原料として、廃品の青銅器を船で運んできたのではないかという考えを知った。塔の首遺跡弥生後期の箱式石棺墓の銅矛副葬と、国際色豊かな遺物 原の辻遺跡の発掘現場まで、見る事が出来た。井原鑑溝遺跡(推定地)に行けた。当然とはいえ、対馬まで「畿内系」古墳があること 吉岐の横穴式石室の見事さと、見学者が少なくなっ



たらきれいに見えた！双六古墳の船の線刻画。(双六古墳と豊橋の馬越長火塚古墳と、奈良県の見瀬丸山古墳とは墳形が類似している)「暦使用国内最古か」と報道された紀年銘入象嵌大刀が出土した元岡古墳群G6号墳発掘現場で、担当者から説明を受けた。和多都美神社の海と鳥居の景色 吉岐から唐津への船上と、雨中の波戸岬から眺めた韓国百済武寧王生誕伝承地のある加唐島 大陸へ

の人々が船を乗り換えた西の漕手 元寇古戦場である小茂田浜が美しいので、海水浴に適していると思ったが、ガイドさんの話では地元民は絶対に泳がないとのこと。歴史は生きている。小茂田浜神社からの帰り、矢立山古墳の近くに銀山があった。勝本城・肥前名護屋城の石垣 万松院の宗家墓所の見事さ、等々でした。



以上の訪問地以外ですが、柳原さんと二人で2日目の朝、ホテル周辺の武家屋敷石垣塀を見ている内に、今屋敷の防火壁(火切石)に気がつきました。出発時間が迫っていたので、築造年月等がどこに刻まれているのか、不明のままでした。夜、夕食を摂りに出かける時、ホテルで懐中電灯を拝借。食後現地に行き、不審者と疑われないかと心配しながら探しました。「天保十五年」と読めました。スッキリしました。

その朝のこぼれ話をもうひとつ。武家屋敷の細い道を歩いていると、「どこから来たの？」と自転車のおじさんに聞かれたので、「愛知県で～す」と答えたら「韓国からじゃなかったんだ」と言っておじさんは笑って走って行ってしまいました。歴史とは関係ないことですが、対馬を離れるとき、絶滅の危機に瀕しているツシマヤマネコはどこにいるのだろう、と思い調べてみると、1日目の北部地域でした。当たり前のように走り抜けた道路の整備も、生息数減少の一因とのこと、心が痛みます。

原の辻遺跡・カラカミ遺跡・元岡古墳群G6号墳の発掘現場の見学と、井原鑑溝遺跡(推定地)近くのビニールハウスや、志登支石墓群から見えた東風小学校付近の、将来発掘の成果が報道されるかもしれない遺跡へ思いを馳せたり出来たのは、西谷先生のお陰でした。初対面の私たちにも暖かく接していただいた会員の皆様のおひとりには、第19回春日井シンポジウムで声をかけていただきました。最後に、この充実したツアーを計画し、満足して全員が元気に帰宅できたのは、事務局の皆様の細やかな心遣いのたまものであったこと、あらためて感謝して終わりにしたいと思います。有り難うございました。





海峡に実を結びつつうみてらし

二日目の夜の鄭禧昇さんのスピーチに思いを重ね「実を結びけり」となることを祈りつつ、以下、拙句で感想を綴りたい。

海人びとの数多の磨斧に木の香かな

峰町歴史民俗資料館収蔵展示室の磨製石斧の数に私は仰天した。ケースにぎっしり。匠の国飛騨でもこうはいかない。海洋民に不可欠な木の船、その木を伐採する磨斧とその場に立ちこめる木の香り。

巨木なる朽ち木に名残アマテラス

本殿の裏に横たわる巨大な朽ち木の齡は知れないが、阿麻氏留神が秋津島の伊勢に遷座したとするなら…。

満ち潮に海月が向かふ小船越

その隠れ家めいた入り江には、黒味を帯びた海月が似つかわしかった。あたかも、しのびよる無数の忍者の残影のように日々秘かに繰り返されるその異様な日常。

秋の汐わたつみの神岩倉に

海原の先に入り江があり、その先に岩倉がある。海中の神は、鳥居に導かれつつ、その岩倉（スポット）へと収斂される。

秋潮を足もとに聞く根曾古墳

上五は「潮騒を」が正しく響きもいいが、季語の「秋潮」とした。長谷川權の句に、「秋潮の削り削るやあきつしま」があり、「日本はその国土の三分の二を山林が覆い、三六度を海に囲まれた島国である。平地は、その弓なりの国土の輪郭線程度にしかない（中略）潮の打ちつける岩礁の先に、この国の姿が思い浮かぶ」とある（ブログ「俳句的展開」、2009/10/23）。とするなら、対馬は「はるつしま」であろうか。そして広瀬和雄の古墳立地論（岩波新書『前方後円墳の世界』など）の一証左を私はそこに見ていた。錯誤かも知れないが…。

彼岸花枯れ川に咲く松音寺

事実は細流があり、「枯れ川」は嘘である。枯れ川＝ワジ＝倭路と駄洒落たわけでもないが、「枯れ川」と断じたほうが句が生きると考えた。花だけを生え出でさせる彼岸花の球根のように、その下には地下水脈が隠され息づいている。すなわち、

大杉に水脈を聴く萬松院

萬松院の創建時の名は松音寺。上五と下五の重さ、釣り合いから寺名をかえてみた。

実直に対馬を語る道の女史

鳥羽美千乃さんの深い教養と分かりやすく気骨あるガイドに感銘した。また一支と伊都のガイドもそれぞれに個性的だった。

双六に新羅を見たり竹の春

鬼の岩屋古墳に見たその輪郭は、雪の新羅の土饅頭を髣髴させた。そして双六古墳の後円部を見て私は確信した。しかしそれには前方部がくっついていて、最初の下五は「前は方」だったが、それでは味気ない。眼下の竹林に倭人伝の「多竹木叢林」を重ね、「春」に「原」を重ねて少し欲張ってみた。それにしてもこの後円部の姿は強烈である。新羅への誇示か、新羅との融合か、それとも在野一生さんが主張する新羅そのものなのか…。

碩学の落ち葉払ひて歩みたり

宮崎邦夫さんが気づかれ、ご教示いただいたこと。西谷正先生のご案内なくしてこの旅の核心やサプライズはありえなかった。その先生の優しい他者への思いやり。

斯麻の嶋空母の如し空焼ける

仰臥する巨人のような島影（馬渡島）の左手にその島影、加唐島は見えてきた。切り立つ断崖がめぐるなだらかな島影に凜とした灯台が点滅していた。まるで、百済へ帰る巨大空母ではないか。時代は戦乱の世であった。様々な確執や兵や富が去来した海空には数刷毛の残照が描かれていた。

元岡は霹靂にして旅終はる

私は大望閣で泥酔し、今も翌日の朝食自体が思い出せない。またしても無礼な言動を吐いたので、はと反省しきりである。その最終日に予期せぬサプライズが用意されていた。つい先日の新聞記事の現場、元岡G6号墳を見学することができるのは！

この充実した旅行を企画・リードされた後藤和晃さんをはじめとする皆様と講師の先生方への感謝の気持ちでいっぱいである。

中学生時、父の影響で句作に没頭した時期があったが、その後ぶつりと途絶えていた。以来50年ぶりの苦作だったが、そのモチベーションは今回の刺激的な紀行そのものにあつたことはいうまでもない。

感動をありがとうございました。

## お知らせ 日韓交流史講座 “知られざる大国 高句麗・渤海” スタート

11月3日、日韓交流史講座の最後を飾る「知られざる大国・高句麗・渤海」シリーズがスタートしました。これらの国々は、日本の教科書の中にもほとんど取り上げられることがなかったために、日本人がその歴史に関心を示すことも殆どありませんでした。

しかし、韓半島の歴史の上では、いずれも重要な地位を占めた大国でした。例えば高句麗は、半島で最も早く仏教文化を受容する一方、強大な武

力を以て隋を滅亡に追い込んでしまったほどの強国でした。

今回のシリーズは、高句麗や渤海の歴史、それにこれらの国々と日本との係わりなどを学んだ上で、現地に8日間の歴史紀行をします。訪ねる先は、中国東北部（旧満洲）から、渤海の版図となっていたロシア領内までで、シベリア地方の有名な都市ウラジオストックから飛行機で帰国する予定です。

日韓交流史講座  
**知られざる大国 高句麗・渤海**  
 2011年 11月 ~ 2012年 6月

日韓交流史フォーラム

NO	日程・場所	開始時間	講義内容	講師
1	11月3日(木) 3階・第2研修室	10:00~	地理で見る 高句麗・渤海	日比谷高校 武井一氏
2	12月10日(土) 3階・第2研修室	10:00~	強大国 高句麗の盛衰	早稲田大学教授 李成市氏
3	1月14日(土) 3階・第2研修室	10:00~	高句麗・華麗なる遺産 ~ 中・朝に残る遺跡 ~	滋賀県立大学教授 田中俊明氏
4	2月19日(日) 4階・第3研修室	14:00~	渤海・知られざる大国 ~ 200年の盛衰 ~	国学院大学教授 鈴木靖民氏
5	3月18日(日) 4階・第3研修室	9:00~	大国 渤海の残影 ~ 中・露にわたる遺跡 ~	金沢学院大学教授 小嶋芳孝氏
6	4月15日(日) 3階・第2研修室	10:00~	渤海と日本 ~ 隠された交流 200年 ~	金沢学院大学教授 小嶋芳孝氏
7	5月27日(日)~6月3日(日) 7泊8日		栄光の高句麗・渤海紀行	九州歴史資料館長 西谷正氏

受講会場は名古屋国際センター内で、開場は各開始時刻の30分前です。

## お知らせ 第27回韓日歴史・文化フォーラム開催

歴史・文化フォーラムの第27回に、日韓交流史講座で、しばしば御協力いただいた韓国の“売れっ子考古学者”慶北大学の朴天秀（パク・チョンス）さんに、ご登場いただけることになりました。朴さんは日韓交流史の伽耶や新羅編の現地紀行を行った際、その情熱的な引率ぶりで参加した人たちを感動させた方です。

若い頃には大阪大学で日本の考古学を学んで日本語はペラペラ、日本で出版した著書「伽耶と倭」はベストセラーとなり、日本の考古学界のシンポジウムには常に招待されているという有名人です。当日のテーマは、朴さんが日本人に今一番話したい内容ということで、ぜひお出かけ下さい。

テーマ	新羅と日本
日時	2012年1月20日(金) 18:00から
参加費	500円
場所	愛知韓国人会館 5F ホール 地下鉄東山線亀島駅 3番出口から1分

## 会員の広場 회원마당

こちらでは会員の皆様の声を載せております。  
皆様から、「会員みんなに伝えたい!」「韓国のここが好き!」は勿論、「こんな旅行して来た」も、日々の暮らしの様子などの皆さんの声を是非、お送り下さい。

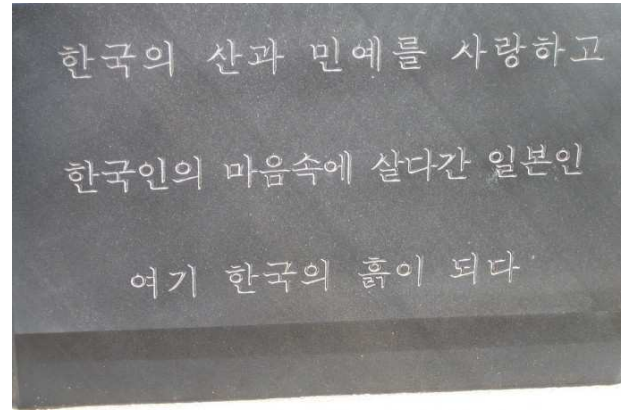
### 弟が頑張っています ~ 映画“白磁の人”製作中

会員：李 純子

私の弟は李春浩(リ・チュンホ)といます。長野県の松本で韓国料理店を営むかたわら、今「日韓人の心を結ぼう!」とする映画の製作の応援でがんばっています。その映画のタイトルは「白磁の人」です。映画の舞台は戦前の朝鮮の京城(今のソウル)です。主人公は、京城林業試験場の技師だった浅川巧(あさかわたくみ)という山梨県出身の人物です。浅川は、林業技師として勤めるかたわら、忘れ去られていた朝鮮の陶磁器の美を再発見、日本人の目を開かせます、日本の民芸運動の創始者として著名な柳宗悦(やなぎむねよし)と図って京城に朝鮮民族美術館も設立しました。職場の朝鮮人のよい友人に徹していたため、昭和6年(1931年)彼が病没した後、朝鮮人の友人たちが二度にわたって浅川を追慕する石碑を建てたという有名な逸話も残っています。

ソウル市内の彼の墓石には韓国語で「韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心に生きている日本人、ここ韓国の土となる・・・」と刻まれ、今でも韓国の市民や学生が花束を手向けている風景がみられます。

私の弟、李春浩は松本で韓日の市民が心を結び合おうという趣旨で、“信州渡来人クラブ”を立ち上げ、多彩な活動をしてきています。そんな弟が感動を受けた本が朝鮮の人と風土、そして民芸美を愛し続けた心優しい日本人 浅川巧を描いた小説「白磁の人」- 江宮隆之著 - でした。彼は「浅川の生き様を、ぜひ映画化しましょう!」と8年前から映画関係者などに訴えかけて



きました。嬉しいことに2005年には、浅川巧の出身地である山梨県で、映画制作委員会が結成され、夢の実現に大きく近づきます。



その後、映画制作に最初に手を挙げた会社が倒産するなど、足踏みする時期もありましたが、今年新しい形で企画が復活しました。出演者も浅川巧を吉沢悠さん、友人役を韓国の俳優ペ・スピンさんなどと決まり、高橋伴明監督(女優高橋恵子さんの御主人です)がメガホンをとって撮影に入りました。9月にはロケも終了し、今は懸命に編集を行っている所です。映画制作委員会や弟たちは、来年の5~6月頃から全国で上映を始めたいと息込んでいます。上映が始まったら会員の皆さん方も友達をなどを誘っていただいて、ぜひ映画鑑賞にお出かけください。

作委員会や弟たちは、来年の5~6月頃から全国で上映を始めたいと息込んでいます。上映が始まったら会員の皆さん方も友達をなどを誘っていただいて、ぜひ映画鑑賞にお出かけください。

### 編集 後記

会報 No.58号をお届けします。今年も早いものでもう年末です。今年は例年以上に気候の歩みが違う年でした。春先の冷え込みから花の季節が遅いまま初夏を迎え、夏は暑かったものの、その暑さが秋まで続き、10月に入っても秋にしては暖かく、その流れで紅葉の進みは遅いまま。天候不順とか言いますが、100年単位、1000年単位で見ればこの程度のゆらぎは極普通。自然の営みの大きさに比べた人の営みの小ささですね。そんな1000年に一度という自然の営みがもたらす大災害が春先にありました。地球は生きていくその上で、我々は生きていくことを再認識せねばならないと思います。(嶽)

日韓市民ネットワーク・なごや  
会報：第58号  
発行：2011年11月30日  
編集：武田章敬